

# IEEJ Industry Applications Society News Letter

電気学会産業応用部門ニュースレター 2006年1月号

## 電気学会産業応用部門国際化推進検討WGの活動紹介



主査 引原 隆士 (京都大学)

平成16年8月の産業応用部門役員会において、電気学会およびD部門の国際化について、特にD部門論文誌の国際化と部門の運営にかかわるいろいろな側面を検討するため、設置期間を同年9月15日から1年間として表記WGを設置することが決定されました。この度設置期間を終え、部門役員会にその活動による答申を行う要請が、本年8月の部門役員会で部門長より出されております。本紹介は、その答申で行う内容の一部をD部門会員の皆様にお伝えし、今後の学会および部門の国際化に会員の立場から積極的に貢献いただきたいという趣旨の元に、広報活動としてまとめております。

本WGは、役員会および委員会から編修担当、会計担当、論文委員会幹事、編修広報委員会幹事、学会本部国際活動委員会委員、電子投稿システム担当等、計10人に参加いただいで構成しております。WGにおける検討課題は多岐にわたってございましたので、部門長より議論の過程で国際化に向けた積極的な提案を役員会に対して行い、実施可能な提案については担当委員会で検討後実施していただく方針が出されました。そこでまず、電気学会D部門の国際化の現状認識に始まり、国内外他学会の状況調査において電気学会の置かれている状況、特にD部門論文誌が置かれている状況を把握することから活動を始めました。

1990年代から始まった大学図書館における電子ジャーナルの普及および引用評価に基づくインパクトファクタ等の国際的な論文誌および論文の内容評価尺度の普及は、学会論文誌にとって黒船的変化となったことは周知のとおりです。論文投稿を考えておられる研究者・技術者の皆様にとって、本学会誌がこの状況をどのように乗り切るかについては、ご自分の成果の発表だけでなくその引用、評価にかかわる重要な問題です。電子ジャーナル化については、国

際的商業出版に対抗するために我国の科学技術政策の一環として生まれた NACSIS-ELS、投稿査読システムを含む J-Stage が国内の種々の学会論文誌に電子ジャーナル機能を提供し、道筋ができました。電気学会も独自の電子ジャーナル化を取らずに J-Stage の一部(投稿査読システムを含まない)を利用しています。しかしながら、学会論文誌が電子的に公開される手段を得ても、学会および部門、ひいては各論文が国際的に正当な評価を受けるためにはクリアすべき問題が多々ございます。学会内部でも部門ごとに大きく意見を分けておりますが、少なくともD部門においては部門論文誌を海外から正当に評価される論文誌にすることがD部門会員へのサービスである、という点をWGでは共通認識として議論を進めて参りました。その結果、

- (1) 部門誌の英文化
- (2) 海外からの論文投稿の促進
- (3) 海外からの論文投稿への掲載料補助
- (4) 国際会議特集号と論文委員会のあり方
- (5) エディタ制の導入および運用
- (6) 部門独自の電子投稿・査読システムの運用およびその英語化
- (7) 学会の共通英文誌への協力

など単に電子公開、論文誌編修に留まらない議論がなされました。

これまでの議論で最も重要で慎重な検討を要する課題は、学会内で部門独立会計を達成し、余力を持って論文掲載料補助を実施することが可能かどうかということでした。ネイティブでない国内の研究者・技術者にとって英文論文が掲載できるということだけでは電気学会に英文論文を投稿するインセンティブにはなりません。しかしそれをクリアできない限り論文誌の国際化はありえませんし、同

---

時に海外からは掲載されている論文の評価がなされず、魅力がないため海外からの投稿が増えないばかりか国内論文も減るといふ悪循環に陥ることになります。この掲載料補助を含めた部門会計問題に踏み込んだ議論が繰り返され、英文論文の掲載料補助の枠組みを作ることを部門誌英文化につなげることが最重要課題として提案され、部門で議論されるようになっております。既に海外からの投稿には学会本部で掲載料の半免が実施されておりますが、国内他学会と比較しても高額な掲載料であり、さらに検討が必要です。次に、IEEE, IEE などが論文掲載に対してごくわずかの掲載料、もしくは無料という状況の中で、電気学会論文誌が掲載料を取っても魅力ある論文誌として残っていくための意義および価値の創出も大きな検討課題でした。短い査読期間と掲載基準・時期の明確な論文誌とすることで、D部門がカバーする分野において国際的優位性を確保するという考えは、IEEE, IEE などで論文の出版を経験された方に共通した意見でした。関連して、D部門が主催している国際会議、IPEC (International Power Electronics Conference), LDIA (International Symposium on Linear Drives for Industry Applications), などに投稿された論文から推薦論文および一般投稿に基づく特集を企画し、掲載時期が明確（ほぼ1年）な英文論文特集号を出版し、国際会議運営資金からの補助も受けて論文英文化率を上げる方策を提案し、既に実行の運びとなっております。このため、D部門独自のエディタ制、電子投稿システムおよび査読システムの運用の中で新しい枠組みが必要となり、論文委員会に編修委員長がゲストエディタを任命し国際会議特集論文

の論文編成作業をするという方式が確立しました。一方、これまで電気学会が保ってきた論文査読の質の高さは、国際的に遜色のあるものではありません。その意味でも優位性を保ちながら質の高い論文誌を編成することが、言うまでもなく論文誌の魅力となります。今後電子投稿システムが英語化されるタイミングで、それらの英文特集号および一般英文論文の編修作業はさらに標準化されるものと考えています。既に、英文論文については海外の査読者に査読を依頼することが可能となっておりますが、電気学会内部の論文誌編修の考え方を海外の査読委員に伝え、良い論文を見極める編修システムとして国際的に認知される作業は、部門論文誌において行うことが必須と考えられます。

WGの議論は集まっただけの検討と同時に、メールを用いた審議に基づいています。WGの意見の方向性としては、部門誌英文化を充実させることに主眼をおき、当面は、部門誌の形態を変えずに、部門誌の中の英文論文を増やす活動と同時にSCIなどの論文誌評価を受ける体制を整えることが重要と考えています。本WG活動も、会員からみるとじれったいものかもしれません。しかしながら、部門の新しい運営体制、システムの構築にあわせた種々の取り組みがWGで議論され、重要な提案となって新たに答申をだす必要がないほど既に提案の一部が実施され始めております。WGの活動はD部門論文誌がその存在意義を国際的に確保するための活性要因となり、部門の準備を一步前に進めたいと考えております。今後、この動きが加速されどのように実施されていくかに注目いただければ幸いです。